

大江健三郎と六〇年代の〈アメリカ〉

—ラルフ・エリスンのいわゆる〈多様性〉^{ダイバシティ}をめぐって—

一條 孝 夫

1 はじめての訪米

一九六五年の夏から秋のおわりまで、大江ははじめてのアメリカに百日以上滞在した。その年以降、アメリカ各地の大学からの委嘱に応じて数多くの講演や講義を行ない、しばしばシンポジウムやセミナーに参加して渡米の機会が増えるにともない大いに貢献するところがあつたためであろう、九七年にはアメリカ芸術アカデミーの外国人名誉会員に選ばれ、二〇〇〇年にはハーヴァード大学の名誉博士号を授与されている。渡米回数がヨーロッパや中国の場合より格段に多いのは、端的に大江のアメリカへの並々でない関心のほどを示しているとともに、最初の滞在においてすでに、そこまでのめりこむに値する因由が存在した可能性が考えられる。はじめてのアメリカで、大江が何を見聞き何について考えたか、その過程を検証する意義はじゅうぶんあるといえよう。

出発直前に執筆した「アメリカの夢」〔新潮〕一九六五・八）の

中で、アメリカ行きのもくろみを次のように記している。

具体的にはハーヴァード大学の夏のセミナーに出席するためであり、そのあとしばらく、あの広大なアメリカを旅行してまわるためである。ぼくはセミナーで、今日のアメリカの黒人作家たちが、ヨーロッパ文学の深い影響のもとに、しかも、かれら独自の小説を書きつけていることへの、僕の関心の存するところを示したい。そのためにはセミナーの大学側の責任者がテキストのひとつに選んだ、ラルフ・エリソンの『見えない人間』が、まず有効な手がかりになるだろう。

セミナーでの主目的が黒人文学についての報告であり、ラルフ・エリスンの長編『見えない人間』（一九五二）の読解を通じて「関心の存するところを示すことであつたというのは、意外なことだろうか。大江は七月から八月、ボストンのハーヴァード大学に滞在してキッシンジャー教授のセミナーに参加し、九月から十月、アメリカ国務省の招待により、主としてアトランタ、ミシシッピー周辺

を含む地域を旅している。招待とはいえ、目的がアメリカの（南部）に片寄っているのは、そこに当人の意向が反映しているからだろう。

周知のように、当時は人種差別問題に端を発した公民権運動の全盛期で、ブラックパワーが急進化する前夜であった。八月には、ロサンゼルスやワッツ地区で大暴動が発生し、テレビで人種暴動を目の当たりにした国民の衝撃は大きく、その後各地において頻発する暴動のひきがねとなったと伝えられている。^① 暴動から五週間後、大江がわざわざ現地を視察していることからわかるように、黒人文学やアフリカ系アメリカ人への関心は時宜を得ていたといえるが、大江の黒人文学のシーズンはそれより数年前までさかのぼる。「流刑者の読書」（『図書』一九六一・七）によれば、五八年の第一回アジア・アフリカ作家会議がはじまる前後から、黒人文学とアフリカに関する書物だけを携行して孤島に流された人間のような読書をはじめた。リチャード・ライトが最初だった」ということである。

当初は『アウトサイダー』（一九五三）の「へいきいきして強くダイナミックな文体」や描写から「技術的な感動」をおぼえた由であるが、その後、該書の再読と『アメリカの息子』（一九四〇）などを通じて、「抗議文学としての性格」に強烈な印象を受けたという。ライトによって代表される当代の黒人文学が、抵抗精神や反逆を苛烈なモチーフとしているのはよく知られている。大江がライト文学の技術的な側面より抵抗精神に共鳴するようになった背景には、自

身へ去年の五、六月をさかいにして、たとえばリチャード・ライトからの刺激のうけかたがことなってきた」と明言しているように、六〇年夏の反安保闘争の体験がある。日本の青年が強権に抗った事実に対する共鳴から、抵抗精神が「私にとって現実生活にも文学にも最も重要である」と実感をこめてさとした^②経緯があり、その体験がライトなどの抗議文学への共感となったようである。ここには、彼我の文学と体験がいかに単純に類比されているように見えるが、両者を結ぶナイーブなまでの類推には、それなりに根拠があった。大江が初期のモダン・ジャズの愛好家であることは、すでに旧聞に属する。ジャズやその基盤となったブルースなどもふくむ黒人音楽への感動が、「ジェームズ・ボールドウインをはじめとする黒人の作家たちにひかれていることと表裏一体」^③であるのも自然である。しかし、だからといって大江は、黒人芸術の日本人におよぼす意味や価値について混同したわけではない。

黒人芸術のなかで、日本人が日本人であることを失わずに理解し、感動し、黒人の精神と感情に直接ふれることが可能な分野は、わずかにリチャード・ライトやラルフ・エリスらの黒人文学のみではなかるうか？「見えない人間」や「アウトサイダー」に感動するときの私は、黒人のかたわらに、白人に向かつて立っている自分を、しかも日本人としての自分を感じた。^④

日本人に直接する黒人芸術はジャズではなく文学だと考える大江が、白人と黒人の間に介在する人種差別問題について、あるいはそ

れをライトモチーフとする黒人文学に対して、日本人が第三者として客体化し得る位置にいるなどというおうとしていたのではあるまい。ましてや、黒人文学への感動を黒人への親近と白人への対峙として受けとめ、それを日本人一般にまで敷衍しているからといって、日本人は黒人問題の理解者だと主張しているわけでもない。

「日本人が日本人であることを失わずに理解し、感動し、黒人の精神と感情に直接ふれることが可能」であるのは、大江が黒人文学に日本文学との異質性より、むしろ共通する課題を読みとっているからである。そのことは、アメリカ行きのもくろみを語って、その關心の所在を、〈アメリカの黒人作家たちが、ヨーロッパ文学の深い影響のもとに、しかも、かれら独自の小説を書きつづけていること〉に見ていたことを想起すればじゅうぶんであろう。六〇年代、日本の近代文学も大江作品も、ヨーロッパ文学の深い影響のもとにあったからである。本稿ではまず、大江がアメリカ滞在中の体験と並行して黒人文学から読み取った日本文学に通う課題、エリスンを直接対象とする問題意識について考察する。

また、大江は前掲の文章で、以上とは別に二つのものくらみについても語っている。一つは、八月六日のセミナーで「ヒロシマ以後二十年について」の講演をすることである。実現すれば、その際のガイドブックとして、出版したばかりの『ヒロシマ・ノート』（一九六五・六）が供されるはずである。もう一つは、旅立つにあたって大江をひきつけてやまない「アメリカの夢」、あるいは「夢のアメ

リカ」において見聞したこと、考えたことを一冊の本にまとめることである。それは『ヒロシマ・ノート』に次ぐ岩波新書の一冊として刊行される予定で、表題まで用意されていたが、なぜか刊行には至らなかった。出版を断念した理由も含め、大江のアメリカ旅行におけるもくろみの帰趨をたどってみたい。

2 エリスンの〈憂鬱〉

アメリカ滞在中、大江は新聞・雑誌の求めに応じて印象記を寄稿することになっていたが、実際には「もうひとつのアメリカ」（『毎日新聞』夕刊、一九六五・八・一六）、「アメリカの百日」（同、一九六五・一一・一―三）のほか、わずかなコラムがあるだけである。アメリカをめぐる短いエッセイ・評論の多くは、帰国後に書かれた。まとまったものとしては、雑誌「世界」に二年越しで発表した〈アメリカ旅行者の夢〉という総題をもつ、以下の五つの評論がある。

- ① 「地獄にゆくハックルベリー・フィン」（一九六六・九）
- ② 「アメリカの夢と悪夢」（一九六六・一〇）
- ③ 「コンピューターの道徳性」（一九六六・一一）
- ④ 「パール・ハーバーにむかって」（一九六七・九）
- ⑤ 「不可視人間と多様性」（一九六七・一〇）

①の発表までに帰国後一年近くを要し、③と④の発表の間にも大

幅なタイム・ラグがあることから、執筆に相当難渋したことがうかがえる。①では、戦時中のアメリカへの恐怖心や憎悪、占領期のアメリカへの依存や屈従によって、いまだアメリカという言葉にへ錯綜した複雑きわまるコムプレックスを免れない大江にとつて、少年期に読んだ『ハックルベリー・フィン』の冒険』の主人公が、例外的にへアメリカに癒着していない自由なヒーローであった経緯が語られる。②では、リンドバーグとジョン・F・ケネディをとりあげ、へアメリカの夢の達成者としてのヒーローの光と影、ヒーローと反ヒーローのかわりあいについて考察される。③では、ハーマン・カーンの理論に沿って、へ核兵器による力の均衡という神話の戦略化をすすめるアメリカ政府に対する嫌悪と、恐怖にみちた自らのオブセッションを語る。④では、広島をめぐる講演をしたさいに被った聴衆の批判から、アメリカの市民がへパールハーバーと広島・長崎を、その意識の内において相殺しているへ現実に一驚し、核兵器のもたらす人間的な悲惨について語り得るのは日本人だという思いを強くしたという。⑤では、今回の主目的であるへ日本人にとつて黒人とはなんであったかという課題がレポートされる。このように、多角的な視点によつて切りとられたへアメリカ旅行者の夢と悪夢が語られてゆくのだが、そのかぎりであれば、黒人文学への関心も、多くのアメリカ問題の視点の一つであるにすぎない。しかし、もともと、この一連の文章が出版を前提に構造化されたという事情もあつて、全体の総括として、⑤に力点がおかれているの

は確かだと思われる。⑤のレポートの内容を追つてみよう。

大江はアメリカ滞在の前半、キッシンジャーが主宰する夏期国際セミナーに参加する。国際政治学者で、七〇年代にはニクソン、フオード両大統領の国務長官をつとめることになるキッシンジャーは、当時ハーヴァード大学で国際問題講座を担当していた。そのセミナーに最後の講演者として登場したのがエリスンで、自作の『見えない人間』が、『ハックルベリー・フィン』の冒険』や『白鯨』に直結していることを明らかにしようとしたということである。大江は、その内容もさることながら、講演するエリスンがまるで自作の冒頭シーンの主人公さながら、へ心暗く、憂鬱なへ顔をして、へほとんど病める海驢のように見えたことに深い印象を受ける。彼があまりに暗く憂鬱だったので、参加者たちはしだいに気づまりになっていったらしい。というのも、それより数週間前にセミナーを訪れたCORE（人種平等会議）の指導者が、へまことに暗く憂鬱な、南部における公民権運動の実際を語りながらへユーモラスなやり方で、いかにも上機嫌な講演ぶりであったのと対照的であったからである。しかし、とりつく島もないように見えたエリスンが、その夜（おりしもワッツ地区の暴動をテレビが中継していた当夜）のお別れパーティにあらわれ、その暗い憂鬱さの影にへ深い優しさをひそめていることを察知できたのを頼みに、大江は彼の作品にオマージュを呈して接触に成功している。へかれのヒーローが、多様性 *diversity* について語る言葉のうちに、アメリカの黒人問題のみなら

ず、日本人をめぐるすべての問題についてもまた、最上のヒントを見出す」ということを大江が話し、エリスンが「自分にとって多様性の問題は、重要な問題だ」と応じたのみであったというが。ともあれ、ここではひとまず、両者のやり取りにあらわれるキーワード、〈多様性〉という表現に注目しておきたい。

セミナーを終え、アトランタで「黒人のための大学」を訪問しようとして乗ったタクシーの窓から見た印象的な眺めについて、大江は長々と記述している。それは、黒人居住区の舗道で「ふたりの黒人が死にも狂いの喧嘩をしている光景」である。早朝の狭い歩道にむかいあった二人の黒人が殴りあい傷つけあっている、ほとんど一瞬の眺めを、まるで小説のなかの情景を思い描こうとするかのようには記憶を克明に再現してゆく。広いアメリカでも黒人居住者が多いことで知られるこの地域では、喧嘩など日常茶飯事であったに違いない。しかし、それが大江にとって忘れ難いのは、他のすべての印象から切り離されて、その場景が「ひとつの衝撃」であったからである。

僕は、暴力そのものよりも、赤裸の恐怖心をそこに見出して
いると感じた。そして、それをこえて僕は奇妙な体験を
あじわっていたのである。それは、殴りあっているふたりの男の背後
に、巨大な白人の眼が存在していて、それが男たちを見つめて
いる、という実感の体験。

大江は、黒人の暴力事件そのものにショックを受けたのではな

い。殴りあっている彼らがともどもに味わっている「赤裸の恐怖心」を実感して震撼したのである。大江の眼には、彼らが本意にも白人たちに強制され駆られて、いつ果てるともなく続く暴力の渦中であって、ひたすら恐怖しているように映った。このとき大江が感受した「巨大な白人の眼」とは、その止めどもない暴力を背後で支配している圧倒的な存在のことである。実際には、ごくありふれた黒人同士の殴りあいだったにせよ、大江はそれを歪曲し、誇張して報告したわけではあるまい。なぜなら、大江の想像力によって再現された場景は、『見えない人間』の主人公の回想にあらわれる白人たちに操られて展開するバトルロイヤルの構図と二重写しになっているからである。大江はこの作品の起点となる当該の場面を、あらかじめ次のように要約している。

かれは優等生として、人間の進歩の本質は謙譲だ、という演説をするために、町の有力者の白人たちの集会にでかけるが、かれが仲間の黒人少年たちと共に強制されたのは、眼かくしをしての、むちゃくちゃのボクシング試合であり、「おなかの小さなアメリカ国旗が文身してある部分」まで、あらわにした金髪裸の女の踊りを見ることであった。それらは、かれに恐怖と憎悪とを、その核心においてあじあわせる。

主人公はこの出来事を代償として、白人の有力者たちから黒人大学へ進学する奨学金を与えられ、その証書が入った鞆をもらう。その晩彼が見た夢は、白人たちから与えられたのが証書ではなく、

へすべての関係者に告ぐ。この黒人少年を走り続けさせよ」と書きつけられた紙切れであったという悪夢である。理想的に見えた美しい大学の内情は偽善と欺瞞に満ちたもので、そこで手ひどい裏切りにあった主人公は、大学を追われ、あの悪夢が予兆したように、差別と騒乱の最中をへ走り続け〜ることになる。その魂の彷徨が全編の主題である。

大江はアトランタの黒人のための大学を訪問したあと、S N C C（学生非暴力調整委員会）の本部と、マーチン・ルーサー・キング・ジュニアが率いるS C L C（南部キリスト教指導者会議）の本部を訪ねている。大江がわざわざアトランタにやって来たのは、むろん（南部）の公民権運動の動向に関心があったからであるが、訪問先として運動の牙城であった黒人の大学と団体が選ばれていることが端的に示すように、その旅の反面は、『見えない人間』の世界を体験することであったと推定される。

南部にやってきた大江の黒人一般についての第一印象は、東部の都市、ニューヨークやワシントンの黒人たちの解放感とは逆の（鬱屈した暗い、閉じた感覚）において際立っていた。それ以上に鮮明な印象を残したのは、S N C Cの本部で出会った知的な若い黒人たちの二重性である。彼らが（明快であざやかな解放感）を示す一方、（ラルフ・エリスンの表情に見たとおなじ、恐怖心に敏感な者の印象と、そして優しさと呼ぶのがあまいにすぎるとなら柔軟な想像力の兆候を見出した）と記している。S N C Cは六〇年に、南部

におけるシット・イン（座り込み）運動を組織化する目的で結成され、構成員の多くが学生であることに特色があった。翌年の、フリーダム・ライド（自由乗車）運動などを経て勢力を拡大し、六四年には所属する公民権活動家たちの先導により、八万人以上の人たちが人種統合をして「ミシシッピ自由民主党」を旗揚げしている⁵。この年の夏、同党の主催したミシシッピ夏季計画にボランティアとして参加した若い白人女性サリー・ベルフレイジが、体験記『自由の夏』^{フリーダム・サマー}（一九六五）を書いた。大江は出版されたばかりの本を、ニューヨークからアトランタに向かう飛行機のなかで読んでいる。大江が会ったS N C Cのスタッフの一人は、憎悪と恐怖のうずまくミシシッピ夏季計画の現場において逮捕された経歴をもつ黒人女子学生で、ベルフレイジの協力者でもあった。大江は、ベルフレイジが実際行動にあつて發揮する、観察力の裏づけとなつている冷徹さを評価して、次のようにいう。

もつとも興味をひかれるのは、彼女がおなじ運動において連帯している白人と黒人の間の、人種的な問題をあえて見つめつづける勇氣をもつていることだ。彼女は黒人たちのために、かれらに加担して働きながら、しかも白人と黒人とをふくむアメリカ人の多様性を見うしなうことがない。

大江はこの文章をアトランタ訪問から二年後に書いているのだが、同時期に出た邦訳『黒い自由の夏を』（朝日新聞社、一九六七・七）の書評では、（おなじ運動に協力する白人と黒人の間の、微

妙な違和感が深くえぐられている所が本書の特徴であり、実力行使の場面では、共闘の印象はあるとしても、へおのずからそこにはわれわれが今日デトロイトその他の暴動において接する「ブラックパワー」の印象は明確となる⁶⁾と述べている。ベルフレイジへの評価は変わらないとしても、本書の読み方が微妙に変化していることに留意したい。S N C Cは、大江のアトランタ滞在時にすでに急進性をあらわにしていたが、その後の先鋭化にはおおかたの予測を超えるものがあつた。六五年二月に暗殺されたマルコムXに影響を受けた指導者がS N C Cの実権を握りはじめ、六六年六月にS N C Cの議長に就任したストークリー・カーマイケルは、ジャクソンで〈ブラックパワー〉を掲げ、人種統合ではなく、白人社会からの分離と戦闘的闘争を叫び、その後しばらくして、より過激な武装集団黒豹党(ブラック・パンサー)の指導者へと転身していった。こうした推移が示すように、S N C Cは全国的な人種暴動の激化ともあいまって、黒人の民族主義運動を拡大する急先鋒であつた。ニューアークやデトロイト暴動で、ブラックパワーが一樣化へのうねりを見せていたころ、大江はそうした状況を占って、へおそらくは、近い将来に多様性が、真の力をもつ時がくるのだ。そのため闘いのひとつがかれら自身の一様化の意志に燃えたとっているように見える、ブラックパワーの若者たちの運動でもあるのだろうと予測している。その時点の判断としては、やや樂觀にすぎるといわざるをえないが、運動の実際を要約すれば、分裂や後退を経ながらも迂回

しつつゆるやかに、そのとおりの方向に進んで行ったといえよう。ブラックパワーの思想は、黒人の間に強い人種・民族意識を浸透させて多様な黒人文化を生み出しただけではなく、他の人種・民族をも刺激して広範な影響をもたらしたからである。大江が早い段階で、危険に満ちたブラックパワーの方向性を正しく予測できたのは、当時信奉していたエリスンのいう〈多様性〉の力を確信していたからであろう。

ところで、当のエリスンはブラックパワーが隆盛であつた時期、大学など公開の場に招かれるたび、彼が組織や公民権運動にいつさい⁷⁾与しないことを理由として厳しく弾劾されたといわれている。『見えない人間』の著者が、伝聞どおり組織や集団運動に冷淡であつたとすれば、それはいったい何故だろうか。

3 『見えない人間』の〈多様性〉

本書の冒頭で主人公は、目下ニューヨークのハーレムに隣接する白人だけが住むビルの〈地下の穴ぐら〉に住んでいることを告げ、自らが〈見えない人間〉であることを痛切に自覚するにいたつた遍歴の日々について語りはじめる。彼によれば、その姿が見えないのは、へひとつが見ようとしな⁸⁾いだけのことであり、自分と接触した相手の人間の内的な眼の、つまり、彼等がそれぞれの肉体的な眼を通じて現実を眺める眼の、構造のせいなのだ⁹⁾という。はじめに

成功の夢を思い描いて入学した南部の黒人のための大学では、白人迎合主義のブレドソー学長の裏切りにあつて放校される。次いで、たどり着いたニューヨークでは、巨大企業であるペンキ会社の末端で働くことができたが、労働者間の対立のまきぞえを食つたうえ、工場の爆破事故に遭遇して、自分の名前さえ思い出せなくなつてしまふ。その後、〈兄弟愛団〉という政治組織に入り、万人の幸福と社会の向上のために懸命に働いたが、ここでも組織を牛耳る白人たちのご都合主義によつて排除されてしまふ。しまいには人種暴動に巻きこまれ、黒人民族主義集団の説教者ラスに追われる一方、警官に追いつめられてマンホールから地下に落下したため、それを契機に〈穴ぐら〉生活がはじまつたのである。

以上の展開が示す遍歴の内実は、帰属する（大学・企業・党派の順にあらわれる）組織に託した個人の夢が、ことごとく組織の論理によつて裏切られていく敗北の歴史にはかならない。エピソードでは、廢残の半生を内観して、自らの難点をへ常に自分以外の誰でものやり方に従おうとするへ順応主義に見出している。

僕はまたいろんな名前前で呼ばれもし、ひとは、僕が自分をどういう名前前で呼んでいるかは、実際には聞きたがりもしなかつた。そんなふうで、何年ものあいだひとの意見を採用しようとなつた努力してきたあげく、僕はついに反逆した。おれは見えない人間だ、というわけだ。

彼にはれっきとした名前があるらしいのに、作中では最後まで明

かされない。プロログでは、〈穴ぐら〉に冬眠中だからヘジョン熊へとも呼んでくれととぼけているが、名前などどうでもよかつたからではない。彼を順応主義へと強制してやまない圧倒的な差別の構造が、彼の名前を奪つたのである。主人公のいう〈見えない人間〉の不可視性には、第一に、存在しながら他者の眼には映らないという無名性（「アイデンティティの喪失」）が含意されている。第二に、彼のいわゆる眼の仕組みの問題。人が、相手の真実を見る内在的な眼をもっていないという構造上の問題は、何も白人に限定されるものではない。黒人もまた同様である。この不可視性のもつ二重性に気づいたとき、彼はこれまでの順応主義から決別できたのである。このように、〈見えない人間〉であるという自覚が、これまでの生き方への〈反逆〉という事態を結果したとすれば、そこには痛烈なアイロニーがある。まるで〈長い道のりをやつてきた〉のに、気がついたら出発点にもどつていたかのようなのである。しかし、事実は必ずしもそうではない。思考の人である彼は、地下の〈穴ぐら〉で冬眠を擬態しつつ、〈地獄的な苦痛〉の日々を内観することで、これまでの順応主義に〈反逆〉する別の原理を獲得することができたからである。へ人間の生活は、憎悪を通じてではなく愛を通じても接近しない限りは、そのあまりにも多くのものが失われ、その意味が失われる。したがつて、僕は対立を通じて接近する。したがつて、僕は攻撃し、弁護し、憎み、愛すへという決意を固めたとき、彼にはもはや〈穴ぐら〉に留まる理由は存在しない。

へなぜなら、見えない人間でも社会的に責任のある役割を演じる可能性があるのだから。

主人公の最終的な言い分はともあれ、地下の〈穴ぐら〉から出て行く意志表明をしたところでやや唐突に終わる小説の結末には、従来から批判がある。へせっかくここまで追い詰めて黒人の存在を表現してきたのが、いささか安易な解決に走ってしまった、へ彼が地上に出てどうなるか、何をしようかといった、方向性が示されていない⁽⁸⁾という批判は、その代表的なものであろう。たしかに、地上に出てからの彼の動静がはつきりと予測できるように描かれていない、という意味ではもつともな主張であるが、作品の構造上の特徴に留意すれば、遺憾ながら無いものなだりといわざるをえない。

『見えない人間』は、走り続けなければならぬ境涯にある主人公の宿命を遍歴として描きながら、(偶然、地下に墜落したことを奇貨として)ぞんぶんに思索をめぐらす内的世界が、それを包みこみ補完するという構造になっている。空間的には水平軸と、そこからの下降という構図である。地下に落下した主人公が復活するためには、地上に出て出て行かなければならない。エリスンの当初の構想にあったのは、地下から地上へ、下降から上昇へという縦軸に沿った再生の寓喩であった蓋然性が高い。よく知られているように、エリスンは『見えない人間』のあと、これとは別の視角からへアメリカ黒人のアイデンティティを考えた⁽⁹⁾長編を構想しながら、自力ではついにそれを完成できなかった。そのことが、とりもなおさず、

主人公の向後に待ち構える困難、すなわち人種問題の解決の難しさを暗示していたといえよう。その意味で、エリスンが黒人青年のそれから書いていないのは、まぎれようもない事実である。しかし、だからといって、へ彼が地上に出てどうなるか、何をしようかといった、方向性が示されていない⁽¹⁰⁾ということにはならない。エリスンはエピソードで、主人公が待望する社会的見通しを明確に記述しているからである。

今では僕は、人間には違いがあり、あらゆる生活は対立しており、その対立の中に真の健全さがあるのだ、ということを知っている。(中略)多様性こそが標語なのだ。人間にさまざま要素を保持させることだ。そうすれば、独裁国家などは生まれはしないだろう。彼等が一様化運動を押し進めたりすれば、とどのつまりは、見えない人間の僕までが白くなることを強制されるにきまつている。

この〈多様性〉についての定義は、大江が直接エリスン本人に向かって、へアメリカの黒人問題のみならず、日本人をめぐるすべての問題についてもまた、最上のヒントを見出す⁽¹¹⁾と表明した根拠となる部分である。『見えない人間』の後半、ニューヨークのハーレムの人種暴動に、破壊者ラスと呼ばれる黒人の民族主義者が登場し、へおおよそ絶望的で超現実的な活動を⁽¹²⁾指揮する場面がある。本来、民族主義の運動とは、その排他性のゆえに、へ多様性⁽¹³⁾とは相いれないへ一様化運動⁽¹⁴⁾の謂である。ラスの形象は、過剰なまでに

超現実的に描かれたカリカチュアとして風刺的であり、そこに作者の批評性をうかがうことができる。早くから指摘されていることであるが、この暴動の場面は、六〇年代の一樣化運動のうねり、ブラックパワーによるニューアークやデトロイト暴動を彷彿させる。本書が、エピソードの積み重ねや人物群像の描写をもふくめ、へ黒人革命によるアメリカ社会の変貌を¹¹⁾先取りしているといわれるゆえんである。語を換えていえば、エリソンは自作を通じて、後続する時代状況をすでに想像力的に体験し、熟知していたのである。

また、主人公が所属した政治組織〈兄弟愛団〉は、かつてエリソンがライトらとともに関係した共産党がモデルであったといわれる。これも、その否定的な描写が示すように、党組織への幻滅の所産であったことは想像に難くない。エリソンが六〇年代の公民権運動や組織に冷淡であったのは、まずもって、それらが体験済みの課題であったからであり、かつへ白人の体制に与せず、同時にブラック・ナショナリズムにも与しない¹²⁾エリソンの揺るぎない政治的スタンスのゆえであったと考えられる。

ところで、作中の話題の人でありながら、実際にはその姿を現わさないラインハートという人物の存在感とその役割は、これまで以上に注意されてよい。宝くじ売りであり、賭博者、贈賄者、愛人、牧師でありながら、その全てであると同時に、そのどれでもないと思わせる謎の人物である。弁舌さわやかで非情で大胆であるうえに、どこにでも出没するらしい。しかしながら、彼は主人公の前に

その実体を現わすことはない。しかも、主人公は、ラインハートを知る誰彼なしに見まぢがえられるほど彼と酷似している。こうした特徴から、ラインハートの形象が、見えない人間である主人公の影、すなわち、生の方途を見失った彼のありうべき姿を示唆する半身であるとともに、現実世界がもつ〈多様性〉の暗喩であることがわかる。そのためもあって、彼はへラインハートの多様な存在の提出した可能性¹³⁾に心引かれながら、その広漠とした流動性に混乱を予感して脅かされるのである。

エリソンは「社会・倫理・小説」(一九五七)という長編エッセイの中で、流動化したアメリカ的な状況下で小説家にできることは何かについて自問自答しながら、小説によってしか解決できない課題として、へぼくたちが豊富に所有しているもの、個性、自由、必然性、愛と死の諸問題についていまだ語られぬ無数の驚異的な多様性、はてしない変身作用をこらむりつつある個性の神秘¹⁴⁾を挙げ、そうした多様な現実をへ生きた形式に凝縮する¹⁵⁾という挑戦を進んでひきうける作家のいるかぎり、小説には可能性があると締めくくっている。

あの『見えない人間』の主人公が変身する際に見出した、へ人間には違いがあり、あらゆる生活は対立しており、その対立の中に真の健全さがある¹⁶⁾という、人類の〈多様性〉を重視する考え方は、八〇年代以降、人種・民族集団など、へエスニックなアイデンティティ¹⁷⁾を尊重する〈多文化主義〉¹⁸⁾の概念に収斂され、それが政治の

領域であれ歴史研究であれ、グローバルな視点にまで拡大されつつあるというのが現代の眺望であろう。それを、さらに二昔以上も前から、黒人のみならず人類の最重要な課題として訴えてきたエリスンの営みは、その先駆性において、もつと評価されてしかるべきであろう。また、エリスンの影響をうけた大江が、同時代の〈多様性〉の問題に注目し、それを自らの文学的命題として先取りしていた事実も記憶されてよい。長編『青年の汚名』（一九六〇）や、『幸福な若いギリヤク人』（一九六二）で、日本の少数民族であるアイヌやギリヤークのアイデンティティの問題を取り上げていたのは、その証しである。¹⁶⁾

4 主題に選ばれる

《アメリカ旅行者の夢》と題された五つの評論は、雑誌に発表後、第三エッセイ集『鯨の死滅する日』（一九七二）や、『大江健三郎同時代論集』3（一九八一）に収録された。しかし、ついに一冊の本にはならなかった。第二エッセイ集『持続する志』（一九六八）には、〈アメリカについてのぼくの想像力にかかわり、現実的な経験にかかわるエッセイであるが、そのふたつの側面において暗礁にのりあげ、それを中絶したままである〉¹⁷⁾とあるので、その時点では出版の意志は留保されていた。その後、本にはならなかったものの、第三エッセイ集には収録されているから、内容それ自体の価値

を自己否定したとは考えられない。となると、出版の断念は、大江が中絶の理由として〈暗礁〉の比喩で示唆した、アメリカについての想像力と現実的な体験に関わる問題のためということになるろう。

六〇年代の前半、アメリカの大学へ留学した文学者による見聞記、小田実の『何でも見てやろう』（一九六一）を筆頭に、安岡章太郎『アメリカ感情旅行』（一九六二）、江藤淳『アメリカと私』（一九六五）が文壇ジャーナリズムをにぎわわせ、世評も高かった。それぞれ、留学中の体験や交友を軸に、彼らにとってのアメリカを思索の対象とする個人的な留学記である。大江の幻の一冊は留学記ではなく、滞在期間も短かったためか、それらとは趣を異にしている。大江の方法は、評論「不可視人間と多様性」に典型的であったように、体験や交友を軸に思索を展開するのではなく、手がかりとなるアメリカ関係の書物を読み解きながら、〈アメリカ〉体験を解説するという手法である。いかにもブックシユな大江らしいやり方といえるが、そのため、彼の数少ない体験や交友にともなう実際の観察が、かえって鮮明な印象を与えることになった。評論全体を通覧して浮上するのは、アメリカで見たこと聞いたことが喚起する核時代・核戦争に対する大江の切実な危機感である。

旅のおわりにまとめたエッセイ「アメリカの百日」には、大江がアメリカでとったノートのうち、もつとも緊急性が感じられるテーマ、〈アメリカの市民たちの、核兵器、あるいは核戦争に対する感情についての印象〉が、いっそうなまなましく記述されている。ポ

ストンに到着して早々、大江はへあらゆる街角に満ちみちている、核戦争用のシェルター<の存在にショックを受けている。大江は、当地においてシェルターが当然のことにように普及した理由を、一般市民の間に浸透している核戦争の恐怖が、核保有国の増加によって核拡散が濃厚となり、局地戦で原爆が使用される危険性が生じたことに加え、中国に対して「異様なほど硬化している敵対感情」>が、一年前の中国の核実験によって決定的になったことに由来すると観察している。また、(そうした市民感情とは一見矛盾するようであるが)、中国の核武装をめぐって、核兵器競争で中国を圧倒すれば可とする保守派の市民と、中国がアメリカのアジア政策を牽制できれば可とする進歩派の考え方が、ともに中国の核保有を是として驚くほど近接している事実を感じた大江は、これこそが「アメリカ旅行の全体を通じて僕にもっとも深刻なショックをあたえた」出来事だと記している。彼らアメリカ市民の考え方を担保しているのは、「核兵器による均衡」を企図するアメリカ政府の国家戦略である。その提案者で、一般にはエスカレーションの理論で知られるハーマン・カーンの講演を、大江はキッシンジャーの夏のセミナーで聞き、「怒りとも絶望感ともまたことなる、暗くもの狂おしい胸苦しき」¹⁸をしたたかに味わっている。カーンの理論には、「エスカレーションの梯子」<の最終段階に想定される全面的な核戦争への倫理的な想像力が欠落している>と思えなかつたからである。大江は各地の大学で、広島・長崎の原爆体験がもたらした思想について

語ったときにも、核の悲惨さより、核の威力を信じて疑わない市民感情に同様の違和感を感じとり、「核時代の狂気を生きのびるために、核兵器の威力の論理にみずからを縛ることなく、核兵器のもたらす人間的悲惨を、自分の論理の核心にすえることのできる唯一の存在は、戦後の日本人でなくてはならない」¹⁹という思いを強くして帰国する。

一九六八年四月一日、ジョンソン大統領はベトナム戦争における北爆の停止と、次期選挙への不出馬を表明した。その四日後、キング牧師がメンフィスで暗殺され、彼の死は、一二六の都市で暴動を引き起こした。大江は、この衝撃的な二つの出来事、すなわち、アメリカ大統領の敗北宣言と、公民権運動の指導者の死を機縁に、戦後二十三年間、日本人全体を支配してきた「強大なアメリカ」像の見直しを要請して、次のように述べている。

この時期にアメリカという国の実体についてあらためて新しい眼でみつめるとすれば、強大なアメリカ、という単純化された一面化されたアメリカのイメージからわれわれが解放されるとき、はじめて現実的なアメリカ理解が日本人に可能となるであろう。それは複雑で多様なアメリカであり、暗殺された非暴力抵抗運動の指導者とおなじく黒人である作家の言葉をかりれば、多様性をそなえたアメリカである。²⁰

二つの出来事から、アメリカの衰退の兆しを見てとった大江は、あえてそこに希望を託して疑わない。大統領の敗北宣言の裏には、

戦争終結への希望がある。キング牧師の死が公民権運動に一時的な混乱を引き起こすとしても、運動の流れを止めることはできない。事態の背後には「アメリカの平和勢力の活動があり、それはまた膨大な数の黒人たちの運動につながっていること」が信じられるからである。大江は、これまで日本人を呪縛してきた「強大なアメリカ」という硬直したイメージから日本人が自由になるとき、エリスンのいわゆる「多様性」をそなえたアメリカ、「へよりもっと人間的な苦しみと希望をともにそなえた、真のアメリカのイメージ」が見えてくると主張する。それを逆にいえば、アメリカ人の多様性を認める立場から、アメリカとの関係を考えることができるようになったとき、日本人の自立がはじめて可能となるのである。こうしたアメリカ観を裏打ちしているのは、言うまでもなく、大江にとって衝撃的で、かつ切実な体験となったのはじめての訪米である。したがって、渡米前に「自分の夢のアメリカに旅立つてゆき、アメリカの夢」⁽²⁾を追いかけるという抱負を、たぶん想像的に思い描いていた大江自身のアメリカ観も、その論理的帰結として、いやおうなく修正を迫られたといえよう。大江は、第三エッセイ集の「第三部のノート」で、『アメリカ旅行者の夢』の出版企画の放棄を告げ、アメリカについては「あらためて新しい仕事にむかいたい」と記したが、目まぐるしく変貌する「複雑で多様なアメリカ」を一元化する難しさもあつてか、今日に至るまで、単独のアメリカ論を発表していない。

大江は訪米直前に『ヒロシマ・ノート』を刊行し、その年の春には、はじめて沖縄を訪問している。その意味で大江のアメリカ行きは、彼が反戦・反核を自らの主題として意識しはじめた時期と重なる。周知のように、その後の大江文学の中心的な課題の一つは、核時代に生きることを余儀なくされた現代人の問題である。世界の核戦略の中心に超大国アメリカが君臨している以上、いよいよ「複雑で多様なアメリカ」から目を離すことができなくなったといえよう。大江の問題意識を増幅し拡大する契機が、はじめてのアメリカ体験にあつたとすれば、大江が核時代の主題を主体的に選択したというより、むしろ主題によって選ばれたといつて、いえなくもない。

注

- (1) ベンジャミン・クォールズ『アメリカ黒人の歴史』（明石書店、一九九四・五）
- (2) 「強権に確執をかます志」（『世界』一九六一・七）
- (3) 「モダン・ジャズとほく自身」（『厳肅な綱渡り』文藝春秋、一九六五・三）
- (4) 「黒人の衰弱と活力—アート・ブレイキーとその楽団」（『朝日ジャーナル』一九六一・一・二二）
- (5) ジェームス・M・バーダマン『黒人差別とアメリカの公民権運動—名もなき人々の戦いの記録』（集英社新書、二〇〇七・五）
- (6) 「サリー・ベルフレイジ『黒い自由の夏』—黒人暴動を理解するために」（『週刊朝日』一九六七・八・一八）
- (7) 荒このみ『アフリカン・アメリカン文学論—「ニグロのイデオロム」

と想像力』（東京大学出版部、二〇〇四・七）、関口功『アメリカ黒人の文学』（南雲堂フェニックス、二〇〇五・四）参照。

- (8) 亀井俊介『アメリカ文学史講義』3（南雲堂、二〇〇〇・四）
- (9) 柴田元幸『ラルフ・エリソンの『遺作』』（『新潮』一九九九・八）
- (10) 「不可視人間と多様性」（『世界』一九六七・一〇）
- (11) 関口功『ラルフ・エリソン二題』（『アメリカ黒人の文学』前出）
- (12) 荒このみ『アフリカン・アメリカン文学論』（前出）
- (13) 『見えない人間』Ⅱ（早川書房、一九六八・六）の二二九頁に、へお前は現実には自分新たな人間にすることができるのだ。そう思うと、心がおびえた。今はこの世界が僕の目の前で流動しているような気がしたからだ。すべての境界がとり除かれた時、自由とは必要の承認であるだけでなく、可能性の承認でもある。そうやって震えながらそこに坐りこんでいた時、僕はライン・ハートの多様な存在の提出した可能性をちらと眼にとめ、慌てて眼をそらした。それは熟視するにはあまりにも広大であり、あまりにも混乱をもたらしそうだったとある。
- (14) 「社会・倫理・小説」の引用は、邦高忠二訳「社会・倫理・小説」（黒人文学全集別巻『黒人文学研究』早川書房、一九六七・五）に拠る。
- (15) 有賀夏紀『アメリカの20世紀』下（中公新書、二〇〇二・一〇）、渡辺将人『見えないアメリカ―保守とリベラルの間』（講談社現代新書、二〇〇八・六）等を参照。
- (16) 一條孝夫『大江健三郎と北方少数民族―われらの内なるギリヤーク人』（『帝塚山学院大学研究論集』第三八集、二〇〇三・一一）
- (17) 「この本全体のための最後のノート」（『持続する志』文藝春秋、一九六八・一〇）
- (18) 「コンピューターの道徳性」（『世界』一九六六・一二）
- (19) 「ポール・ハーバーにむかって」（『世界』一九六七・九）
- (20) (1)に同じ。
- (21) 「強大なアメリカ」像の崩れたあとに……」（『週刊朝日』一九六八・四・二〇）

(22) 「アメリカの夢」（『新潮』一九六五・八）

〔付記〕

ラルフ・エリソン『見えない人間』本文からの引用は、黒人文学全集第九巻、第十巻、橋本福夫訳『見えない人間』Ⅰ、Ⅱ（早川書房、一九六一・一、一二）に拠った。